

武州工業株式会社

一日八時間、毎月二〇日

勤務で世界と戦える

新興国にて安価で生産される製品と、人件費の高い日本で生産される製品ではコストが大きく違う。しかし武州(東京・青梅市)の地でも、インドやブラジルと同じ値段でつくれるという

低価格自動車部品の製造と

働きやすい環境づくりの両立

武州工業の代表的な製品は自動車部品用のパイプだ。自動車のエンジンには年々小型化が進んでいる。そのため、パイプは狭い隙間を通さなければならず、形状は複雑にならざるを得ない。曲げ半径を小さく抑える同社の高度な加工技術が、それを可能にしているのである。

一方で、自動車業界における部品調達原則はLCC(Low Cost Country)。世界中で最も価格の安いところから仕入れるという意味である。そうすると東南アジアや南米

などの新興国に比べ、人件費の高い

日本で作るのは明らかに分が悪い。実際、多くの下請け企業が海外に生産工場を移している。しかし、武州工業を率いる林英夫社長は、そういう戦略はとらなかった。

「武州の地でもインドやブラジルと同じ値段でつくれる」

一九九二(平成4)年に社長に就任して以来、林氏は一貫してこの信念を貫いている。二〇二二(同24)年に東京商工会議所が主催する「勇気ある経営大賞」の優秀賞を受賞したときの挨拶でも「国内で世界と戦えるコストの自動車部品を製造すること。それが、当社の勇気あ

- 会社設立 1952年
- 代表取締役 林英夫
- 業種 パイプ曲げ加工、板金加工メーカー
- 資本金 4,000万円
- 従業員 160名
- 所在地 東京都青梅市末広町 1-2-3



林英夫 (はやし・ひでお) :1952年東京都生まれ。日本大学生産工学部電気工学科卒業。カメラメーカーを経て、1978年に武州工業株式会社入社、1992年代表取締役に就任

る経営である」と述べているくらいだから、その姿勢は筋金入りだ。

それにしても、武州工業ではいったいどうやってそれを実現しているのだろうか。もし、それが社員の過剰労働や人材の使い捨ての上に成り立っているとしたら、あるいは、結果として赤字覚悟の不安定経営を強いられているなら、その勇気は決して褒められるべきものではない。だが、林氏の話をつかがっていると、どうも状況は真逆のようだ。

「一日八時間、毎月二〇日勤務の『八・二〇体制』、これが当社が目標とする労働環境で、現在ではほぼ達成されています。さらに、一五(同

27)年にはパートのうち、希望者全員を正社員にしました。ほかにも同一労働同一賃金や、育児や介護を行なっている社員のために時短制度を導入するなど、働きやすい職場づくりを日々進めています。おかげさまでここ数年離職者はほぼゼロです。また、先代のころの一九六〇(昭和35)年から黒字決算を継続中で、優良申告法人の表敬を七度受けています。ちなみに、当社の所属する立川法人会に加入する一万二〇〇〇社のうち、七度の表敬は当社を含め二社だけだそうです。自己資本比率も五割を超えており、経営上の問題もありません」